

【論文】

デヴィッド・マレーとスミソニアン・インスティテューションとの交流
— 明治初年の博物館創設過程 —

David MURRAY and the Smithsonian Institution: the Process of the
Foundation of Japanese Museums in the Early Meiji Era

財部 香枝*

Kae TAKARABE

Abstract:

Using the unpublished old correspondences between David Murray, a superintendent of the Japanese Ministry of Education (Mombusho), and the Smithsonian Institution, the author discusses Murray's activities and his role in a history of Japanese museums. His activities, in detail, in early days of the Japanese Museum are still veiled, whereas unveiled well in the field of general administration on education in Japan. The used letters are now in the Smithsonian Institution Archives. The author also refers to a process in which Japanese and American national museums started to do a mutual exchange of the museum specimens.

1. 序論

デヴィッド・マレー (David Murray : 1830-1905) は、1873 (明治6) 年6月に来日し、1879 (明治12) 年1月に離日するまでの約5年半の間、文部省学監[明治7年10月4日以降 ; それまでは督務官] (Superintendent) として文部省草創期に助言を与えつづけた御雇米国人である。マレーが、文部大輔田中不二麿と緊密に連携しながら日本の教育行政に携わったことは広く知られている。しかしながら、博物館史において、マレーの具体的な活動が主題として取り上げられた事は管見の限りない。そこで本稿では、博物館史研究においてこれまで未利用のスミソニアン・インスティテューション・アーカイブス (SIA) 所蔵の書簡を用いて、マレー

* 中部大学中部高等学術研究所研究員

平成16年11月1日受理

およびスミソニアン・インスティテューション (Smithsonian Institution) との関わりを検討し、マレーが具体的にどのように教育博物館創設過程に関わったのかを明らかにしたい。さらに、マレーの実際の博物館活動を明らかにする作業を通して、彼の活動を博物館史において再評価したい。

筆者は、博物館草創期におけるアメリカの博物館の影響を博物館史において正当に位置づける必要があると考えており、これまで万延元年遣米使節団、岩倉使節団、森有礼とスミソニアン・インスティテューションとの交流を明らかにしてきた (財部 1999、2002、2003)。本稿もまた、これまでの一連の探究に続くものと位置づけられる。なお、SIA所蔵の書簡は、アメリカ合衆国議会図書館 (U.S. Library of Congress) 所蔵のデヴィッド・マレー文書 “The Papers of David Murray” に所収されておらず、国内外のマレー研究において初出の資料である。このため、本稿末に全文 (和訳) を掲載する。

マレーは、1830年ニューヨーク州デラウェア郡ボバイナに生まれ、デラウェア・アカデミー、ファークソンビル・アカデミーを経て、ユニオン・カレッジを卒業する。その後、ニューヨーク州オールバニー・アカデミーの講師、教授 (数学・自然哲学)、校長を経て、1863年ラトガース・カレッジ [植民地時代に創設されたクイーンズ・カレッジが1825年に名称変更] の数学・天文学教授となり、10年間在職の後、来日した。

1871 (明治4) 年に文部省が創設されると、同省はそれ以後日本の教育全般を統括することとなった。翌1872 (明治5) 年5月には、東京に最初の師範学校が設立され、同年8月、文部省は「学制」を發布した。文部省は学制を実施に移すため、欧米の教育者の助言と協力を必要とした。そこで、1872 (明治5) 年、米国からマリオン・M・スコットが東京師範学校の顧問として招かれ、翌1873 (明治6) 年、教育行政の顧問としてマレーが招かれたのである。マレーは、それから5年半にわたり文部省に勤務し、田中不二麿文部大輔を補佐した。その間、1875 (明治8) 年秋から翌1876 (明治9) 年末までの1年2ヵ月間、合衆国独立100周年を記念したフィラデルフィア万国博覧会 (1876) の日本展示のためにアメリカに出張している。1878 (明治11) 年任期満了となり、1879 (明治12) 年アメリカに帰国した。帰国後、マレーはニューヨーク州大学校理事会事務局長に就任し、10年間その職を勤めた。

マレーに関する先行研究は、日本の教育の近代化に果たした役割、来日以前の米国での経歴、来日の経緯、離日後の活動など、数多くなされてきた。

たとえば、『お雇い外国人5：教育・宗教』 (重久 1968：21-27) のほか、仲 (1956)、金子 (1990)、羽田 (1990)、佐藤 (1999) などの論考は、主に教育の近代化との関わりが論じられている。また、羽田 (1986) は来日前のマレーの動向を、後藤 (1985-1986) は来日経緯を、それぞれ主題として取り上げている。明石 (1983) は、マレーの宗教思想および高等教育観 (特にリベラル・アーツ教育観) を取り上げ、日米文化交渉史におけるマレーの位置を考察した。

他方、渡辺（1990：359）は、アメリカからの科学の導入という科学史的観点から論考し、次のように指摘する。科学分野でアメリカが日本に対して早くから広範な影響を与えたのは、アメリカが日本の開国に指導的役割を演じたことによるものだった。1859年以来日本に滞在したオランダ系アメリカ人宣教師フルベッキ、文部大臣の教育顧問として1873年に招かれたマレーは、日本の教育制度全体および日本に呼ぶ外国人教師の選抜に大きな影響力を及ぼした。これは、明治初期日本の科学に対する第2の、そして一層直接的なアメリカの影響とみなすことができる」と評価する。

近年のマレー研究としては、これまで未利用の海外史料を用いてマレーに関する新知見を示し、再評価を試みる傾向が見られる。たとえば吉家（1998）は、従来のマレー研究者がマレーと親交のあったごく少数の日本人（そのほとんどは田中不二麿など、当時の文部省官吏）のマレー評に頼ってマレーの教育観や人柄を想像し、彼の言動を解釈してきたと指摘し、マレーの生涯と業績を詳細に研究して再評価を試みた。すなわち吉家は、マレーが文部省にどのような助言を与えたのか、そしてそれはなぜか、彼はどのような教育観、教育行政観をもっていたのか、そしてそれはどのように形成されたのか、を探究するために、国内資料、在米資料を調査し、マレーの全生涯を明らかにした。

また古賀（2001）は、マレーに関する先行研究を概観し、各研究において用いられる資料が主に日本側資料のみに依拠することが多く、あるいは在米資料の一部しか使用されていないため、論述に限界があったと指摘する。古賀は、在米資料“The Papers of David Murray”の重要性が指摘されながらも、その文書の内容を体系的に用いた研究はほとんどないとし、同資料および日本側資料とを照合して考察する必要性を指摘し、“The Papers of David Murray”の総括をとおしてマレーを教育史において再評価した。古賀は、マレーとキリスト教との関わりに着目し、キリスト教布教活動と日本の教育の近代化との関わりを論じているところが新しい。

上述の教育界による近年の研究は、従来のマレー研究が、資料的な制限により論述に限界があったことを示唆するものである。この指摘は、博物館史におけるこれまでのマレー研究にも当てはまるだろう。マレーの仕事上のパートナー田中不二麿は、日本でのマレーの業績として、（1）開成学校を東京大学へと発展させ、日本の高等教育の基礎を築いたこと、（2）女子師範学校と幼稚園の創設により、日本の女子教育が大いに刺激され、また学校における幼児教育が日本に導入されたこと、（3）教育博物館の創設により、世界の教具が収集され、国民に外国の教育用器具備品を示すことができるようになったこと、の3点を挙げる（吉家 1998：229）。このような田中不二麿の評価を受け、博物館史において、マレーの教育博物館創設への貢献が指摘されてきた（椎名 1988：46-47）。また、近年、教育博物館創設過程に関する先行研究を踏まえ、明治初年においてマレーと田中不二麿との関係および教育博物館創設過程を再整理し、黎明期の博物館史の再考が試みられた（内川 2004）。

2. マレーとスミソニアン・インスティテューションとの交流(1)：マレー来日前

上述の先行研究を踏まえた上で、SIAの往復書簡（資料参照）を用い、マレーとスミソニアン・インスティテューションとの交流を、整理・分析していく。なお、マレー滞日中の日本の博物館を巡る動きは、内川（2004）を参照してほしい。

(1) 学閥

マレーは、ニューヨーク州オールバニー・アカデミーの講師、教授（数学・自然哲学）、校長を務めた。一方、スミソニアン・インスティテューション初代長官ジョセフ・ヘンリー（Joseph Henry）もオールバニー・アカデミーを卒業し、同校の助手、教授を務めた。両者には、同アカデミーという共通点がみられる。羽田（1986：79）は、来日前のマレーの活動をアメリカ側資料を用いて明らかにする中で、両者の交際を示唆する。すなわち、1863年にオールバニー・アカデミーの創立50周年を祝った同アカデミー校長マレーは、多くの同アカデミー出身者を知ることとなったが、50周年記念式典に祝電を寄せたヘンリーとも交際があったと推察されるというのである。

現存するマレーとヘンリーとの間の書簡の中で最初のもは、その50周年記念式典の2年後の1865年である。それは、マレーが恩師ジョージ・H・クック（George H. Cook）教授・ニュージャージー地質調査所所長の名誉博士号申請に際して、ヘンリーの力添えを頼むものである（1865.6.21）。クックは、オールバニー・アカデミー校長の後にラトガース・カレッジ教授を務め、マレーとは親しい子弟関係にあった（羽田 1986：76）。マレーが、恩師クックの名誉博士号取得に関して、オールバニー・アカデミー出身かつ同所で教鞭もとったことのある、ワシントン有数の実力者ヘンリーに頼るのは自然だったであろう。

(2) 科学者

マレーは、ユニオン・カレッジでは古典コースを専攻していたが、在学中に人文科学から自然科学、工学へと関心を移行させ、カリキュラム上可能な限り多くの自然科学、工学を履修した。たとえば、自然科学としては幾何、三角法、植物学・地質学、化学、微積分、天文学、光学、また工学としては、製図、力学、測量学、測量工学、電気学、道路・鉄道、橋梁を履修した（吉家1998：41-43）。同校卒業後、オールバニー・アカデミーでは、数学・自然哲学を、さらに、ラトガース・カレッジでは数学・天文学を教えた。

このようなマレーの科学的関心を裏付ける書簡も残っている。たとえば、アトランティック・ケーブルによる経度決定に関するグールド（Gould）博士の報告書がスミソニアン・インスティテューションによって出版されたが、マレーは同出版物をヘンリーに所望している（1870.4.27）。

またマレーは、日本赴任後に金星の日面通過を観測したいと考えていた。彼は、スミソニアン・インスティテューションの気象観測ネットワークに適合するのであれば、気象学の道具1

セットを自分に委託してほしい、そうすれば、その観測結果を報告するとヘンリーに伝えている(1873.3.24)。この申し出に対してヘンリーは、空欄用紙、雨量計、標準温度計を供与すると応えている(1873.3.28(?))。1871年3月、アメリカ合衆国議会は、金星通過の観測事業を国家的規模で推進する事を決定した。それを受け、「金星通過観測委員会」が発足したが、ヘンリーはその5人の委員の一人であった。

金星通過の観測について敷衍しておきたい。金星の日面通過(太陽の手前を金星が通過する現象)を地球上の異なる地点で観測・測定することで、太陽と地球の間の絶対距離を求めることができる。1874(明治7)年12月9日のその機会到来に備えて、世界各国の観測隊が観測に適した東アジアに遠征した。観測隊は、日本にも遠征し、ジャンセンらのフランス隊とダビットソンらのアメリカ隊は長崎で、メキシコ隊は横浜で観測した。このように金星観測は、世界的に注目を集めていたが、マレーもまた、天文学者として大きな関心を寄せていた。マレーは長崎のアメリカ隊に加わり、この時の観測を基に「金星実測ノ説」を執筆している(『文部省雑誌』23:1874.12.3)。

(3) 宗教

マレーは、来日以前には積極的なキリスト教活動を展開した。彼の両親はスコットランドからの移民でありプロテスタント教会・長老派の教会員であったことから、マレーも長老派教会に加わり、オールバニー・アカデミー時代にはステート・ストリート長老派教会の設立に関わった。また、ラトガース・カレッジでは、同大学の教派である改革派教会員として活動した。改革派と長老派は教義および実践で多くの共通点をもつが、彼は改革派教会の長老を務め、また日曜学校主事を来日前まで務めていた。さらに同大学ではY.M.C.A.の設立も援助し、自ら初代会長となった(Chamberlain 1915: 2、古賀 2001: 62)。

マレーの関係した長老派、改革派は、海外伝道教会で中心となったグループ(カルバン派)である。マレーは、近代化して西洋の制度・学校制度が普及すれば、必然的にキリスト教化されるというキリスト教観を持っていた。すなわち彼は、キリスト教を否定したのではなく、宗教と大学教育は別と考え、近代国家をキリスト教国が科学技術的發展を遂げたものにとらえた。彼は、このようなキリスト教観によって、現実的で友好的な、楽観的で自信のある、寛容な(と評される)態度で日本の近代化に関わることができた(古賀2001: 61-63)。

古賀が指摘するように、西洋先進諸国が發展途上国の近代化を志向した点について、キリスト教と近代化との関係に注目して全体像をとらえる必要があるだろう。一方、ヘンリーもまた、森の質問状に対する回答において、道徳的感情・習慣をもつためには、キリスト教をはじめとする宗教教育が必要であると説いている(尾形1963: 355)。

(4) 知日派

マレーの日本への関心は、ラトガース・カレッジでマレーの下に学び御雇米国人となったウ

イリアム・E・グリフィス (William E. Griffis) や、同カレッジの日本人留学生との関わりの中から生まれたとされる。

実際マレーは、ヘンリー宛書簡において、ラトガス・カレッジの白峰駿馬と勝小鹿が合衆国のインスティテューションを視察するためにワシントンを訪れることをヘンリーに知らせ、同地で便宜を図るよう依頼していた (1870.4.6)。この書簡から、マレーの日本人留学生への関心の強さが窺える。

筆者はこれまでの研究において、万延元 (1860) 年遣米使節団、岩倉使節団、森有礼、等の日本人とヘンリーとの交流を明らかにしてきた。このマレーの書簡は1870年4月に書かれており、これは岩倉使節団の渡米前であり、また森の米国赴任前である。このような早い時期に、マレーがヘンリーを知日派として認識していた可能性、あるいは、その点に訴えてヘンリーの助力を請おうとした可能性は、看過すべきでないだろう。

(5) 来日の経緯

来日の経緯は、後藤 (1985-1986) が主題として取り上げているが、スミソニアン・インスティテューションとの関わりでは、ほとんど論じられていない。来日の経緯には、マレーとヘンリーの友好的な関係が、実際には大きく関わっている。また、来日経緯は、来日後のマレーとスミソニアン・インスティテューションとの関係を決定づけることでもあるため、以下ではその経緯を整理しておきたい。

これまで、マレー招聘には、森有礼の教育に関する質問とマレーの回答が大きく関わっていると指摘されてきている。森有礼は、岩倉使節団一行のワシントン到着に先立って、アメリカの著名な教育者たちに質問状を発送した。岩倉使節団がアメリカに滞在中、日本では文部省が正院に「外国人御雇入ノ儀伺」を提出していた。学制の実施にあたって、文部省が外国人の顧問を招聘しようというのである。森は1872年2月3日に質問状を発送し、回答は2月中旬から3月中旬にかけて集まってきている。一方、岩倉使節団がワシントンに着いたのが2月29日であり、使節団は当初から質問状の回答者を対象に外国人教育者の選考を行ったとされる。すなわち、森はワシントンに向かって旅行中の使節団のためにこの質問状による調査を行ったと考えられるという (吉家1998:71)。当初、日本側はコネチカット州教育委員長バードジー・G・ノースロップ (Birdsey G. Northrop) を考えていたが、彼が辞退したために、マレーに決定した。

マレー決定に際しては、マレーの回答が、他に比べて具体的であったことも関係するとされる。吉家 (1998:108) は、マレーがいかに選ばれたのかを詳細に検証し、マレー招聘に関して決定的な役割を演じたのは、木戸孝允と田中不二麿であったとする。しかしながら、森が木戸・田中に批判されていた点も考慮する必要があるだろう。

来日の経緯に関するこれまでの研究では、古賀 (2001:23) が指摘するように、マレーがい

かに「選ばれうる人物像」であったかなどが探究されてきたが、「来日の動機」は描ききれていない。そこで、以下では、マレーとヘンリーとの間で交わされた書簡から、来日の動機を探っていきたい。

【マレー→ヘンリー：1872.1.4】 周囲の状況は私に、日本に対して、そして国家資源を発達させようとする彼らのすばらしい努力に対して、並外れた関心を与えてきた。日本に行って、どこか適切な場所でこの政府の任務に就きたい。彼らはすでに数人のアメリカ人を雇用しており、他にも雇用しようとしているかもしれない。現在、重要な使節団が、視察や情報収集のためにこの国に向かっている途中である。彼らが、照会を行ったり、また、適切と考えられる改革の導入を助けるために日本へ行くのに適している人を推薦するように求めてくるかもしれない。私が任務を確保する際の助けとなるように、あなたがいつも若い科学者へ与えてきたご尽力を請いたい。ワシントンに滞在中の日本の大臣森氏へのあなたの言葉は、大きな力を持つだろう。そして、もしあなたの名前に言及する[引き合いに出す]ことをお許しいただければありがたい。私の仕事は常に教育の向上、科学、工芸技術に関係してきており、これらの促進に有益であろう任務を好む。私がしばらくの間オールバニー・アカデミーの校長であったこと、現在は当地の全米哲学天文学 (National Philosophy and Astronomy) [協会] の会長であることを忘れないでほしい。

「周囲の状況」というのは、前述したように、ラトガース・カレッジでマレーの下に学び御雇米国人となったグリフィスや、同カレッジの日本人留学生を指すのであろう。続いてマレーは、その「周囲の状況」によって、「国家資源を発達させようとする彼ら [日本人] のすばらしい努力」に関心を持つようになったことから、「日本に行って……政府の任務に就きたい」と言明し、さらに、自身の学術的関心から、「教育の向上、科学、工芸技術の促進に有益であろう任務」を希望する。また彼は、日本の使節団が日本での任務の適任者をヘンリーに照会するかもしれないので、マレーがその仕事を確保できるように、ヘンリーから森へ推薦してほしいと依頼する。

これにより、日本での任務に関して、マレー自らがヘンリーに働きかけ、ヘンリーを介して森にアプローチしようとしていることが明らかとなった。さらに、これが、2月3日の森の質問状が出される前のことであることにも、留意すべきであろう。すなわち、当初から日本に関心を持っていたマレーが自ら、日本で仕事に就きたいという意欲を表明し、ヘンリーに力添えを頼んでいるのである。

その際、マレー自身が「オールバニー・アカデミーの校長」であったことに言及し、ヘンリーが教鞭をとったオールバニー・アカデミーで自身も教鞭をとっていたという共通の経歴に訴えている。また、「全米哲学天文学 [協会] の会長」であることに言及している点も興味深い。すなわち、マレーは、当時ヘンリーが若手科学者の推薦に際し、力を発揮していたことを十分承知していたのである。

また、「ワシントンに滞在中の日本の大臣森氏へのあなたの言葉は、大きな力を持つだろう。」

……もしあなたの名前に言及する[引き合いに出す]ことをお許しいただければありがたい。」という言葉から、マレーがヘンリーと森有礼ら日本関係者との間のコネクションを承知しており、さらに、ヘンリーの名前を出して彼の力を借りようと企図していたことがわかる。実際、森の質問状に対するマレーの回答（1872.3.7）には、アメリカを代表する科学者として、フランクリン、モールスらとともに、「ヘンリー」が引き合いに出されている（尾形 1963：359）。これは、マレーが、ヘンリーを引き合いに出すことが、日本側にいかにアピールするかを理解していたことを裏付けるものであろう。

この間ヘンリーは、岩倉使節団がワシントンに向かっている最中、下関事件賠償金償還請求を合衆国議会図書館委員会に提出している。その中でヘンリーは、スミソニアン・インスティテューションが、博物学・民族学の標本交換および気象学・磁気・他の物理学的観測について、日本当局と友好関係に入ったことを強調し、さらに、下関事件賠償金償還によって、教育上の目的のための国立の機関を江戸に設立するよう提案している（1872.1.10）。同日、ヘンリーはマレーに、「[下関事件賠償金] 基金700,000ドルは、江戸の科学的な機関の設立に割り当てるべきであると提案する文書を議会図書館委員会に提出するつもりである。……計画が同意されれば、1つの職が有能で教養ある紳士に開かれるだろう。そうすれば、喜んであなたを森氏に推薦する。その件について彼と協議し、その結果をあなたにお知らせする」（1872.1.10）という手紙を書いている。それに対しマレーは、「文明の技芸の中で自分達を高めようと殊勝にも努力している彼らを支援するために、その国に[ヘンリーが示唆する]機関を設立することにまさる日本賠償金の適切な用途は、考案できないと確信している。そのような機関の設立や組織化に喜んで協力したい。……すでに相談した親切な上院議員フリーリングハイザン（Frelinghuysen）があなたの提案を議会に通過させる際の多いなる助けとなることは疑いない。その件で何か支援できることがあれば、喜んでお役に立ちたい」（1872.1.12）と応えている。賠償金とマレーの関わりの詳細については、後述する。

これまで見てきたように、マレー自らが日本での任務に関心を持ち、ヘンリーに働きかけた。ヘンリーはマレーの件を森と協議することに前向きであり、実際、彼は森へ働きかけたと推察される。このような動きが最終的に、森の木戸らへの働きかけに繋がったのではないだろうか。しかしながら、森が木戸・田中に批判されていた点を考慮すると、森の働きかけの有効性については今後検討する必要があるだろう。いずれにせよ、このようなマレーの来日経緯にヘンリーが関わった事は、来日後の両者の関係にも影響を及ぼすものであり、留意する必要があるだろう。

3. マレーとスミソニアン・インスティテューションとの交流(2)：マレー滞日中および離日後

1873年6月30日のマレー来日後は、フィラデルフィア万国博覧会前・博覧会中・博覧会后・

離日後に分け、マレーとスミソニアン・インスティテューションとの関わりを整理・分析していく。

1) フィラデルフィア万国博覧会前

(1) 知日派

前述したように、マレーはラトガース・カレッジの日本人留學生がワシントンを訪れる際、当地での世話をヘンリーに託した。これは、マレーがヘンリーを知日派として認識していた可能性、あるいは、その点に訴えてヘンリーの助力を請おうとした可能性を示唆する。

同様に、マレーは日本に赴任した後も、日本公使としてワシントンに向かう吉田氏への支援をヘンリーに求めている(1874.10.30、1874.11.5)。これは、ワシントンに不案内な日本人の後ろ盾となりうるのは、ヘンリーをおいてほかにないと、マレーが考えていることの裏付けであるだろう。

(2) 科学者

前述したように、マレーが日本に赴任している間、ジャンセンらのフランス隊とダビットソンらのアメリカ隊が長崎で、またメキシコ隊が横浜で、それぞれ、金星の日面通過を観測した。マレーは、以前アメリカがペルーに天文学調査隊を送った際にその器具を同国に残した件に言及し、日本の天文学の発展のために、アメリカ隊の使用済の天文学器具を文部省に借り受けられるよう、ヘンリーに力添えを頼んだ(1874.9.7)。

マレーは、ヘンリーが合衆国金星通過観測委員会の委員であることを知っていたし、さらに、ヘンリーが日本の文明化を熱望していたこと、そのためには、西洋科学の導入が不可欠であると考えていたことを十分に理解していた。

(3) 下関事件賠償金返還運動

1863(文久3)年5月10日、朝廷の攘夷政策を実行しようとして長州藩は下関海峡を通過するアメリカの商船とフランス、オランダの軍艦を砲撃した。翌年、イギリス、アメリカ、フランス、オランダの四国連合艦隊は報復として下関を砲撃し、一時砲台を占領した。その後、徳川幕府は連合国側と条約を結び、下関事件賠償金の支払いを約束した。この時、アメリカの受け取ることとなった賠償額(75万ドル)はアメリカ船の受けた被害に比べて不当に高額であった。

賠償金は国庫に収められず「下関賠償金基金」となった。下関賠償金の返還運動を最初に始めたのは森有礼とヘンリーである。国務長官ハミルトン・フィッシュ(Hamilton Fish)は森に同基金を日本に返還すべきと語り、森が秘書のチャールズ・ランマン(Charles Lanman)にその対処を尋ねた。その時、森は、「専ら教育目的に注ぐか、東京に一大図書館を創設すべきと提案するつもりである」と述べた。ランマンは、提案はアメリカ市民に正しく知らされねばならないので、スミソニアン博物館のヘンリーに事を始めてもらうのが適当であると意見を述べ

たという。それを受け、森からヘンリーを訪ねるように命じられたランマンは、提案の詳細をヘンリーに説明した。ヘンリーの提案で、ランマンは議会図書館の合同委員会宛の書簡を作成した。ヘンリーは、その書簡内容を修正・拡大し、自分で署名した後、委員会に宛てて送付したという（財部 2003：36）。

前述したように、マレーは、来日の過程においてヘンリーの賠償金償還運動に関わり、来日後も、賠償金償還に関心を持ち続けた。たとえば、ヘンリーに「基金の歴史を示すパンフレットを準備することを提案」したり（1873.8.13）、「日本賠償金基金の処理に関する計画の草案を同封する。これを上院議員フリーリングハイザンに転送するとともに、アメリカ工業科学大学の設立のためにこの基金を用いる考えがあなたから示唆されたことを彼に伝えた。この件を適切に議会に提起する際に尽力するよう上院議員フリーリングハイザンに頼んだ。私は当地にいるので、当地に学術機関を設立するために基金を用いるというあなたの考えは、この国民に最も有益な方法であるとますます確信して」おり、ヘンリーからフリーリングハイザンに手紙を書いてほしいと依頼している（1873.12.22）。その後もマレーは、請願書の署名用紙をヘンリーに送るなど、活動を続けた（1874.11.5）。

一方、国内の動きを見ると、同年1873年11月、マレーは田中不二麿を通じ、岩倉具視に下関賠償金返還に関する覚書を提出している。

これまで、賠償金返還運動において、マレーはヘンリーの意図を引き継いだと示唆されてきたものの（吉家 1998：134-135）、「マレーの日本での活動と、アメリカでの賠償金返還に関する動きとの間の関連を示す証拠は今のところない」（吉家 1998：136）とされてきた。しかしながら、上述してきたように、日本招聘を巡るヘンリーとの関わりの中で、早くも、マレーが1872年1月に日本の賠償金に関心を持ち、ヘンリーの賠償金返還運動を支援することを表明していたことや、日本に赴任してからも、ヘンリーと連絡を取り合いながら、アメリカでの返還運動と連動して活動を進めていったことが明らかとなった。

（4）その他

開拓使顧問ホーレス・ケプロン（Horace Capron）とヘンリーの間には親交が見られた。ヘンリーは、ケプロンを介して、日本の人種の例証となる肖像画を得ようとしていた。それをケプロン自身から聞いたマレーは、ケプロン離日に際し、ケプロンに代わって自分が何でもするとヘンリーに申し出ている（1874.11.5）。このようにマレーは、ヘンリーに支援を請うばかりでなく、何らかの形でヘンリーの役にも立ちたいと願っていた。

逆に、ヘンリーもまた、日本で要職に就いたマレーのコネクションを頼ることがあった。たとえばヘンリーはマレーに、日本で教育・外務関係の職に就くことを希望しているアメリカ人を推薦したこともあった（1874.7.10）。

2) フィラデルフィア万国博覧会中（滞米中）

マレーは、合衆国独立100周年を記念したフィラデルフィア万国博覧会（1876.5.10-11.10）の日本展示のために、アメリカ出張を命ぜられた。これに伴い、マレーは、1875（明治8）年10月11日に日本を出発し、翌1876（明治9）年12月26日に再来日するまで、滞米することとなった。マレーは、この約1年2ヵ月のアメリカ出張の間、東京に設置予定の博物館に展示する資料、すなわち博物学の数部門、西欧諸国の芸術作品と工業製品、教育と文明の器具などを収集した。その中には、E・S・モース（E.S. Morse）からの「合衆国周辺の海洋生物の標本1セット」、ニューヨーク・ロチェスターのウォード（Ward）からの「動物の剥製と骨格の標本」、[マレーの恩師] ニュージャージー州G・H・クック教授からの「ニュージャージー州の地形および地下資源を表す標本一組」、スミソニアン・インスティテューション副長官（後の第2代長官）で国立博物館担当のスペンサー・F・ベアード（Spencer F. Baird）からの「魚の複製の標本」が含まれる（椎名 1988：46-49、吉家 1998：230-231）。

マレーは、教育資料の購入、交換、贈与の交渉を通じて、当時のアメリカの一流の研究機関や組織と連絡を取り、著名な学者、教育者、教育行政家と知り合うことができ、その中にベアードもいたのである（吉家1998：184-185）。その時の知己を契機として、マレーとベアードの間に書簡授受が始まる。

【マレー [フィラデルフィア] →ベアード：1876.10.26】 万国博覧会の諸外国政府の展示の大部分がワシントンの国立博物館に寄付されたこと、そしてそれらは分類・整理のためにワシントンへ移されることを知った。多くの複製が集まるので、それらの一部を異なる博物館に配布することが提案されていると理解している。標本配布の場合には、日本の文部省代表として、東京の文部省博物館に1セットを懇請する。農業展示が同様に配布される場合には、この申請がそれにも適応されるようにご考慮いただきたい。

マレーは、万国博覧会に展示されていたコレクションがワシントンの国立博物館に寄付され、ワシントンに移送中であると聞きつけ、それらの複製を様々な博物館に配布する際には、文部省博物館に1セット受入れたいとベアードに請願している。フィラデルフィア万国博覧会を介して、ベアードと知己を得たことは、マレーの再来日後の収集活動に大いに役立つこととなる。

なお、滞米中マレーはヘンリーとも交渉し、援助を受けた（吉家 1998：184-185）。

3) フィラデルフィア万国博覧会后（再来日後）

フィラデルフィア万国博覧会終了後に再来日してから帰国までの間、マレーとスミソニアン・インスティテューションとの書簡は、その内容のほとんどが博物館関連であり、マレーがどのような博物館活動を行ったのかを窺い知ることができる。再来日後のマレーは、ヘンリーのみならずベアードとの間で日米両国の博物館に関して連絡を取り合った。

(1) 標本交換

教育博物館開館後の国外からの寄贈資料について、公共施設の中では博物館からの寄贈が件

数、点数ともに最多であり、その中でスミソニアン・インスティテューションが首位を占めていたとされる（椎名 1988：78）。

『国立科学博物館百年史』（国立科学博物館編 1977：96）によれば、1878（明治11）年から文部省を經由してスミソニアン博物館と鳥類、魚類、鉱物などの資料の交換が始まった。スミソニアン博物館へ交換資料として送るために文部省から委託され、1878年、教育博物館本館物品掛の職員門井保定は植物採集のために秩父辺に、また波江元吉は動植物採集のために大阪、和歌山へそれぞれ出張した。このときの採集品は本館で調製され、翌年4月7日に文部省へ引き渡された。これは、1879（明治12）年の『教育博物館年報』に「曾て文部省ノ命ヲ受ケ蒐集セシ米國スミソニアン博物館等へ贈付セラルヘキ本邦鑛石魚類等整頓セシニヨリ四月七日ヲ以テ之ヲ同省ニ廻送ス」と記録されている（国立科学博物館編 1977：111）。

一方、スミソニアン・インスティテューションから教育博物館への標本受入れについては、1880（明治13）年にアルコール漬け魚類標本184点、翌1881（明治14）年に同魚類標本212点が寄贈されたとされる（椎名 1988：78）。

このように、教育博物館は、他国の博物館に先駆けて、スミソニアン・インスティテューションと標本の交換を始めたが、その過程の詳細は明らかにされていない。

今回の書簡調査により、スミソニアン・インスティテューションから教育博物館への寄贈は、1877（明治10）年のアルコール漬け魚類標本および鳥類標本が最初であることが判明した。以下では、この標本授受の事例を取り上げ、日米間の関係者の動きを追い、マレーがどのように博物館活動に関わったのかを見てみたい。

1. 【ヘンリー→マレー：1877.6.14】 スミソニアン・インスティテューションが、アルコール漬け標本配布用を作成し、文部省博物館マレー博士に贈る旨、通知する。
2. 【マレー→ヘンリー：1877.7.23】 アルコール漬け標本1セットの送り状を同封した6月14日付け手紙を受け取った。文部省および文部省博物館を代表して感謝の意を表す。ニューヨークの日本領事館に通知し、そのコレクションを日本に転送する手配をする。
3. 【マレー→文部省副大臣：1877.7.23】 スミソニアン・インスティテューションが文部省博物館へ寄贈する標本チェックリストをヘンリーから受け取った旨をメモにて連絡する。]
4. 【マレー→ベアード：1877.8.8】 ヘンリーからアルコール漬け標本1セットを送ったという通知を受け取った。ヘンリーに礼状を送り、転送の指示も出した。この標本は、スミソニアンの複製標本の配布の一部と考えてよいか。
5. 【マレー→ベアード：1877.8.9】 8月8日付けの手紙を送った後に、7月11日付けのベアードの手紙を受け取った。それは、私の照会事項にいくつか答えている。「アメリカの魚類」はヘンリーがチェックリストを送ったものであると思う。ヘンリーは「鳥類」については言及していない。

6. 【文部省副大臣→マレー：1877.8.9】 先月23日付けのメモを受け取った。ヘンリーに感謝の意を表するとともに、その運送に関してはニューヨークの日本領事館に送る旨、ヘンリーに手紙を書いてほしい。

7. 【マレー→ヘンリー：1877.8.10】 6月14日付けの文部大臣宛の通知に感謝する。

8. 【マレー→ヘンリー：1877.10.30】 アルコール漬け魚類と鳥類を受領したことに感謝の意を表する。]

9. 【マレー→ベアード：1877.10.30】 ヘンリーに、アルコール漬け魚類と鳥類を受領したという礼状を書いたところである。それらは立派な標本コレクションであり、鳥類は、ざっと数えたところによると、約100くらいある。魚類のチェックリストのおかげで、全ての物に適切にラベルをつけることができる。

ヘンリーは、マレーを文部省博物館の代表と認識し、彼宛に標本リストを送った。マレーもまた、文部省および文部省博物館を代表して即座に礼状をヘンリーに送付している。同時に、マレーは文部省副大臣に、スミソニアン・インスティテューションから標本が送付される旨をメモにて連絡している。他方、マレーは、標本の詳細についてはベアードに確認をしている。このように、日米間の最初の標本交換は、すでに親交があったマレー、ヘンリー、ベアードを中心にスムーズに進められた。

(2) 標本購入

教育博物館の標本購入に際し、マレーとベアードが直接交渉した事例も見られる。当時骨格標本制作者として広く知られていたニューヨークのウォード (Ward) の骨格標本購入にあたっては、マレーがスミソニアン・インスティテューションに600ドルを先払いし、購入を依頼していた。これは、上述2) のフィラデルフィア万国博覧会開催中にマレーが収集したとされるニューヨーク・ロchesterのウォードからの「動物の剥製と骨格の標本」のことと思われる。その後、骨格標本が送られてこないのので、マレーは再び、ニューヨーク市の日本領事高木三郎氏へ通知するよう依頼している (1877.8.8)。

ベアードは、国立博物館に予算が充当されなかったため、ウォードの骨格標本送付に遅延が生じたとし、「それ [来冬予算] が来るまで当該の移送は不可能である」と伝える。さらに、スミソニアン・インスティテューションが交換として送った標本を600ドルの一部として含めることができるかどうかを次のように打診する。「当時そのつもりはなかったが、もし博物館によってすでにあなたに送られた標本を600ドルの備品として含めるならば、適当な時期に骨格標本の追加物をあなたに惜しみなく与えるだろう。その時あなたが東京にいてもいなくても、それらはあなたが設立に尽力してきた博物館の利益になるだろう。我々が送ったようなコレクションは、だれによっても、またどのような価格でもなされえないだろう。600ドルではなおさらである。」 (1878.7.19)。

その後、来冬に予算の獲得が困難と判明した際に、ベアードは、マレーに次のように釈明しつつ、すでにスミソニアン・インスティテューションが交換として送った標本資料を埋め合わせとみなすよう求めた。

【ベアード→マレー (1878.9.28)】 文部省博物館に骨格標本などを供給する件に関する契約の遂行について言及せねばならないが、状況は我々にとってあまりにも厳しい。2会期前の議会から予算がつくことを期待したが、まだ予算獲得に成功していない。来冬、望ましい交付金がついたとしても、複製を出すまでに少なくとも1年かかるだろう。それまで待っていただけるならば、私が覚えておくことにして、その時がくるまでその件はそのままにしておきたい。鳥類や他の標本の膨大なコレクションを東京博物館にすでに送ったことを、確実にご存知であると思う。そのコレクションはセンテニアル [フィラデルフィア万国博覧会] の寄贈を埋め合わせるものとみなされる。……しかし、将来、万一状況がもっと良くなれば、おそらく別の交付金がつくだろう。

このようにマレーは、ベアードを介して、標本購入に携わった。

(3) 日本コレクションの収集

ヘンリーは、日本と標本交換を開始することを望んでおり、国立博物館のためのコレクション、とりわけ博物学、人類学、芸術品、工業品などのコレクションを作るようマレーに委託した (1877.9.8)。ヘンリーは、スミソニアン・インスティテューション創設時には博物館運営には消極的だったが、この時点では、積極的な収集姿勢が窺える。

当時、日本の博物館には交換のための複製標本の蓄積がほとんどなかった (後述)。そこで、マレーはベアードに、「博物館を築き上げることはしばらくの間ゆっくり進むだろうし、また、外国の博物館とのコレクション交換は遅れるだろう」と伝えた上で、日本の「芸術や博物学」を示すもの、「産業」を示すものを日本で独自に収集し始めており、それを本国に持ち帰るつもりだと告げる。「スミソニアンはそのような物のための適切な場所であると考え」とし、収集に伴う手数料および実際の支出額を補填してもらえるかどうか、打診している (1877.6.4)。

ヘンリーはマレーに、「博物館は標本の費用を支払う金銭的余裕はない、少なくとも何の約束もできない」と連絡してきた (1877.9.8)。マレーはヘンリーに次のように伝える。

【マレー→ヘンリー (1877.9.8)】 7月9日付の貴簡を受け取った。スミソニアン・インスティテューションのためのコレクション収集を私に委託してくださり、私を信頼してくださっていることを感謝している。日本の風俗習慣やその民族学などを示す多くの物を個人的に収集できるが、そのようなコレクションを一般的に作るには、必ずいくらかの支出を伴う。多くの種類の一般的な物、とりわけ美術品、工芸品をすでに集め始めた。おそらく国立博物館は将来的には私の支出を弁償して私からこれらを得ることができるだろう。しかし、それは2次的な問題である。交換をなし逃げるために、私ができることは喜んでほしい。彼らは貴所の寛大さや蓄積に満足しているので、その目的のために収集するように努力させるのは困難なことではない。

マレーはヘンリーに、交換が可能となるよう尽力することを強調するとともに、個人的に収集したコレクションの買い取りが可能かどうかを再度打診している。同時に、マレーはベアードにも、再び「費用がないと、芸術（品）、工業品等を多く集めるのは困難であろう。私はこの種の物をいくつか集めている。もし将来博物館が私に払い戻してそれらを欲するのであれば、喜んで引き渡す」（1877.9.8）と個人的なコレクションの買い取りを打診している。

その後、スミソニアン・インスティテューションは、「我々は日本の先史を表す物、とりわけ石器および最古の形態を有する陶器〔pottery〕を保存することに特に関心がある」（1878.4.2）とマレーに伝えている。

（４）博物館に関する情報交換

マレーとヘンリー、ベアードとの間で交わされた書簡からは、当時の日米両国の国立博物館の状況が浮かび上がってくる。

上述したように、スミソニアン・インスティテューションは、交換によって日本のコレクションを受け入れようとしていた。マレーは、日本の国立博物館のコレクション収集状況や外国の博物館との交換状況などを次のように連絡する。マレーはベアードに、1877年当時の日本の博物館の状況について、「その博物館を築き上げることはしばらくの間ゆっくり進むだろうし、また、外国の博物館とのコレクション交換は遅れるだろう」（1877.6.4）、「当地の博物館〔museums〕は複製の蓄積もまだないし、広く交換を始める状況にもない」（1877.9.8）と訴える。1876（明治9）年教育博物館年報には、動植物、鉱物など国内の資料から収集し、その上で重複資料を諸外国との交換資料に活用するという方針が示されているものの、実際には収集が進んでいなかったのである。

マレーは、ヘンリーにも同様に、「交換の方法によって当地でしうることは現在のところあまり多くない。なぜなら、物の際立った蓄積がまだなされていないし、複製標本がまだ非常にまれだからである。しかし、私はこの点について彼らの注意を喚起してきた。そして彼らの両博物館〔both their Museums〕が交換用の複製標本を収集する事業を真剣に始めるよう希望する」（1877.9.8）と伝えている。

またマレーはベアードに「博物館は信用に値するものになりつつある。すでに博物館はそれのために与えられた建物より大きくなりすぎている。しかし、日本土着の標本の複製の収集においては、まだそれほど多くの進歩は見られない。新しい外国の物を入手するよう手配するために、全精力を注ぐ必要があった」（1877.10.30）と伝えている。1877（明治10）年3月に落成し、8月に一般公開となった教育博物館の建物は、マレーにはすでに手狭に映ったようである。また、当時の日本の博物館が、自国の標本の複製を作成するよりも、外国の標本資料を入手する方を優先していたことが窺える。

マレーはベアードに、「本省の博物館はあなたのために食用魚のコレクションを作っている。

それは約100変種 (varieties) を含むと思う。準備が整い次第、お送りする。あなたのために銅の鉱石も 2、3 としてあるので、魚類と共に送る」と、文部省博物館が食用魚コレクションを作成中であることを伝えるとともに、「当地でのコレクション収集は非常に困難である。標本を入手すべき個人的な収集家が多くないので、ほとんどすべてのものをオリジナルな出所、すなわち政府の各省から入手せねばならない。彼らは何かを供給することに好意的である」(1878.2.25) と伝え、いまだ博物館に複製標本の蓄積が少ないことを訴えている。

一方、マレーは、スミソニアン・インスティテューションの国立博物館の置かれている状況にも関心を持っていた。マレーのベアード宛書簡には「議会が国立博物館用の建物の予算をあなたに与えなかったことを残念に思う。次の議会ではこの重要性が理解されることが望まれる」(1877.6.4) と伝え、ベアードは、「望ましい施設を提供されなかったが、来冬には望ましい援助があると自信を持っている。」(1878.7.19) と返事を書いた。これは、フィラデルフィア万国博覧会の展示物が、スミソニアン・インスティテューションの国立博物館に受け入れられることとなったが、それを展示するための新博物館建設の予算が組まれなかったことを指している。この間、展示されていた標本は武器庫に保管されていたが、ようやく1881年にスミソニアン・インスティテューションの2番目の建物は落成したのである(現工芸産業館、Arts and Industries Building)。

このほか、標本の交換の際にベアードはマレーに、2、3の標本を送れば、同定した後に1つを返却することができる、あるいは、類似する標本を共通の番号を付して保存するのがよい、というような助言も行っている。

【[ベアード] →マレー：1878.4.2】 日本の魚類の大きなコレクションを準備しているというお知らせに感謝する。できるだけ早くそれらを同定し、その情報をあなたに与えることができれば嬉しい。それぞれの種について2、3の標本を送るのがよいだろう。そうすれば、1つを返却することができるだろう。また類似する標本を共通の番号を付して保存するのがよいだろう。それは同じ目的に応えるだろう。

(5) モースへの関心

モースは、来日にあたりベアードから渡された紹介状を、マレーに手渡した(1877.8.8)。これから、ベアードがモースの日本での活動に大きな関心・期待を寄せていたことが推し量られる。このベアードの関心に応えるため、マレーは、折にふれ、モースの動向を伝えている。たとえば、「大学の博物学教授および博物館員として当地に2年滞在させることが決定した」(1877.8.8) ことや、彼が「現在臨海実験所 [江ノ島] でこつこつ研究」(1877.8.8) している様子などである。

【マレー→ベアード：1877.9.8】 モースは夏に素晴らしい仕事をした。彼は、当地の大学と2年間の契約を結び、30の臨海実験所を設立することとなった。彼は小型海生動物標本の巨大なコレクションを作った。私は彼のセットにすぐに食用魚、食用軟体動物を加えるよう促した。彼は現在大学の準備を進めている。

彼は、大学博物館での仕事同様に博物学を教える予定である。協定によって、彼は11月に本国に戻り、講演の約束を履行し、諸博物館と交換を取り決め、3月に当地に戻る予定である。彼が収集した全てのセットをあなたが得るよう取り計らうこと、そして記載や命名の際にあなたの協力を得ること、を彼は私に約束した。

【マレー→ベアード：1877.10.30】 講演の約束を履行するために、そして家族を連れ出すために、モースはこの郵便輸送船によって帰国する。彼は同定と交換のために多くの資料を本国に持っていく。彼は多くの物をあなたにもたらすと私に約束した。これは、一部には、スミソニアンの出費を省こうとする私の努力であるとみなしていただきたい。

マレーは、モースが採集した標本をスミソニアン・インスティテューションに寄贈するよう計らい、それに対しベアードは、「モースの標本をいくつか受け取ることを期待する」(1878.9.28)と答えている。

4) 離日後

1879(明治12)年1月にマレーは日本を離れた。マレーの離日後、数年を経てからも、異なる種類の日本の国立博物館と学制の関係や文部省と教育、大学などとの関係について困惑したベアードは、マレーに照会している(1885.5.11、1885.5.15)。それに対し、マレーは日本の学術社会に関してベアードに教示した(1885.5.21)。当時、日本には文部省系、内務省・農商務省系の国立博物館があり、その事情に疎いベアードには、日本の教育システム、博物館システムが理解しにくかったものと考えられる。

4. 結論

これまで、マレーおよびスミソニアン・インスティテューション(およびその博物館)との関わりを詳細に辿り、マレーが同所と交流し、研究協力を行い、博物館の資料充実などを巡って意見交換を行ったことを明らかにした。以下では、このようなマレーの活動を博物館史において正当に位置付けたい。

(1) 博物館草創期におけるコレクション収集

マレーはたびたび教育博物館のコレクション収集が困難であることをヘンリー、ベアードに伝えている。

1871(明治4)年5月14-20日、招魂社境内で大学南校物産局主催の物産会が、1872(明治5)年3月10日-4月30日、湯島聖堂で文部省博物館主催の博覧会が開催された。その際、永久に寄託されたものもあったので、閉会後も1と6のつく日(31日は除く)に一般公開された。一方、1873(明治6)年3月、文部省博物館は博物館、書籍館、小石川薬園とともに、太政官所轄博覧会事務局に併合され、文部省系の博物館施設は一時的に消滅し、同時に標本コレクションも失うこととなったのであった(椎名 1988: 33-42、椎名 1989: 54-59)。このように文部省の教

育博物館は、標本収集が急務とされていた中、他国の博物館に先駆けてスミソニアン・インスティテューションと標本交換を始めた。その際、マレーはヘンリーやベアードと直接連絡を取り、尽力した。この点において、マレーが果たした役割は大きいと言えるだろう。

（2）博物館草創期におけるアメリカの博物館の影響

『日米文化交渉史3（宗教・教育編）』（岸本・海後編纂 1956）は、アメリカの教育思想、教育制度の受容を概観できるものであるが、同書は、明治初年、日本は学制を初めとする多くの文教政策についてアメリカに範をとったことを明らかにした。

また、「明治初期の日本教育にアメリカの影響が大きかった一つの理由は、モルレー [マレー] の業績にあった」（重久 1968：24）とされる。

教育博物館もまた、田中不二麿やマレーによってアメリカに範をとり施行している教育制度の流れのなかの一つとして運営されてきており、アメリカのみの資料を収集してきたこともまた当然であった—教育博物館開館後は、1878（明治11）年パリで開かれた万国博覧会を機に、手嶋精一の意向を反映して、アメリカよりも欧州へと収集先が移行して行く（椎名 1988：82）。

このような指摘があるにもかかわらず、これまでの博物館史研究では、幕末・明治初年の博物館創設・発展過程は、ヨーロッパの博物館との関係を中心に論じられ、マレーとアメリカの博物館との関わりが探究されることはほとんどなかった。

日本の博物館概念の形成や、博物館創設に与った先駆的人物としては、町田久成、田中芳男、佐野常民、田中不二麿、手嶋精一、九鬼隆一らが挙げられる。彼らは、幕末・明治初年に、使節団として、あるいは海外留学生として、西洋で博物館を実見する機会を得て、その経験が彼らの博物館構想に影響を与えたとされる。たとえば町田久成・手嶋精一は英国の大英博物館を、佐野常民は英国のサウス・ケンジントン博物館を、また田中芳男はフランスのジャルダン・デ・プラントを念頭に置いていたという（東京国立博物館編 1973、国立科学博物館編 1977）。これまで、これら先駆者の人物の博物館構想が博物館史研究の主題となってきた結果、日本の博物館草創期におけるアメリカの博物館の影響は看過されてきた。

しかし、これまで見てきたように、博物館草創期において、日本の博物館関係者とアメリカの関係者が交流し、研究協力を行い、博物館の資料充実などを巡って意見交換を行った。これらの交流は、実際に、両国国立博物館の標本交換の道を拓いた。このような日米研究者の交流、意見交換の実態は、これまで看過されてきており、本稿はその欠落を補完するものである。

この日米交流の背景には、マレーとヘンリーとの交友関係が大きく関係する。日本の近代化に並々ならぬ関心を寄せるヘンリーは、万延元（1860）年遣米使節団、岩倉使節団（1872）、森有礼、開拓使顧問ケプロンなどの日本関係者を長年にわたり支援したが、マレーもまた、ヘンリーの支援を受けたのであった。

また、マレーとベアードが、互いに両国の国立博物館の運営に携わる者として、またその発展を願う者として、関心や問題を共有していた点も看過できない。

このように、明治初年の博物館運営・活動の実践面においては、これまで考えられてきた以上に、マレーの下、アメリカの影響を受けたと結論づけられるだろう。

(3) 今後の課題と展望

本稿の探究は、スミソニアン・インスティテューションとの交流に限られたものであり、アメリカの博物館の影響の一端を解明したに過ぎない。

また、ヘンリー、ベアード、およびマレーの博物館観も博物館史の中で問われてしかるべき主題である。さらにそれが、マレーの博物館政策・運営にどのように繋がっていくのかも探究すべき課題であろう。一方、博覧会事務局からの分離によって文部省系博物館が発足した際、博物館書籍館長に畠山義成が、書籍館掛兼博物館掛に永井久一郎がそれぞれ任命されたが、両者はラトガース・カレッジ出身であり、人事面でもマレーの意志が反映されていたと考えられる。彼らとマレーが、実際どのように連携し、博物館政策・運営に携わったのかも、探究すべきだろう。

今後は、本稿によって明らかになった知見に加え、先行研究や博物館史ではこれまで未利用の“The Papers of David Murray”も用いて、総合的な検討を行い、アメリカの博物館が明治初年の博物館に及ぼした影響を探究する必要があるだろう。これらは、今後の課題としたい。

謝辞

本誌の匿名の査読者の指摘によって改稿を行った。有益な指摘に感謝したい。

文献

- 明石紀雄 1983「米国からの教育使節：デビッド・マレー」筑波大学『地域研究』1：111-21
- Chamberlain, W.I. 1915 *In Memoriam, David Murray, Ph. D., LL. D.*
- 後藤純郎 1985-6「学監モルレー雇用の経緯」『教育学雑誌』第19号：18-30, 第20号：1-15
- 羽田積男 1986「来日前のダビット・モルレーについて」『日本比較教育学会紀要』第12号：75-81
- 羽田積男 1990「ダビット・モルレーの教育論」『教育学雑誌』第24号：15-28
- 金子忠史 1990「日本の教育行政の現代化に果たしたデーヴィッド・マレーの貢献」アーガス・パークス編『近代化の推進者たち』思文閣出版：290-311
- 岸本英夫・海後宗臣編纂 1956『日米文化交渉史3（宗教・教育編）』洋々社
- 古賀徹 2001『文部省顧問David Murrayと日本の近代教育に関する研究』（文部省科学研究費補助金成果報告書）
- 国立科学博物館編 1977『国立科学博物館百年史』国立科学博物館
- Lanman, Charles 1872 *The Japanese in America* Longmans, Green, Reader, and Dyer（『森有禮全集3』1972に

所収)

文部省『文部省雑誌』23

仲新 1956「教育行政史上におけるDavid Murrayと『学監考案日本教育法』」(日本教育学会編)『教育学研究』
第23巻第2号:38-51

尾形裕康 1963『学制実施経緯の研究』校倉書房

大久保利謙編 1972『森有禮全集3』宣文堂書店

佐藤秀夫 1999「D.マレー「学監考案 日本教育法」と「学制」改正:明治初期教育政策の形成と御雇外国人」
日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』第57号:169-87

重久篤太郎 1968『お雇い外国人5:教育・宗教』鹿島研究所出版会:21-27

椎名仙卓 1988『日本博物館発達史』雄山閣出版

椎名仙卓 1989『明治博物館事始め』思文閣出版

財部香枝 1999「幕末における西洋自然史博物館の受容:万延元年(1860年)遣米使節団とスミソニアン・イ
ンスティテューション」『博物館学雑誌』第24巻第2号:63-79

財部香枝 2002「1872年の岩倉使節団によるスミソニアン・インスティテューション視察:明治初年における
西洋の自然史博物館受容過程」『博物館学雑誌』第28巻第1号:25-44

財部香枝 2003「明治初年における森有礼とスミソニアン・インスティテューションとの交流:西洋の博物館
受容過程」『博物館学雑誌』第28巻第2号:33-52

東京国立博物館編 1973『東京国立博物館百年史』(本編・資料編)東京国立博物館

内川隆志 2004「デイビッド・マレーと田中不二麿:明治初期における教育制度と博物館」『国学院大学博物
館学紀要』第28号:3-28

渡辺正雄 1990「太平洋をわたる科学:19世紀後半の日米科学文化交渉史」アードス・パークス編『近代化の
推進者たち』思文閣出版:354-78

吉家定夫 1998『日本国学監デイビッド・マレー:その生涯と業績』玉川大学出版部

資料 マレーとスミソニアン・インスティテューションとの間の書簡授受一覧

(資料中の【マ→ス】、【ス→マ】は書簡の宛先を示す。()内は差出人・受取人の名)

【マ→ス (ヘンリー)】ニュージャージー地質調査所所長ジョージ・H・クック (George H. Cook) 教授の友人が、彼のためにどこかの大学、おそらくニューヨーク大学に名誉法学博士号を申請しようとしている。私は彼の了解を得ずにこの手紙を書いているのであるが、彼の科学の共同研究者の判断として、そのような名誉が驚くべきものでないかどうかをあなたに伺いたい。申請書作成の際にあなたの草稿を使いたい (1865.6.21)。

【マ→ス (ヘンリー)】私の友人白峰駿馬氏と勝小鹿氏を紹介させていただきたい。二人は日本人で、当地で学問に専心している。彼らは当政府のインスティテューションに精通するためにワシントンを訪れる。彼らは日本の上流階級の若者であり、我が国およびその事情についてできる限り正確な知識を持ち帰ることを熱望している。彼らがワシントンにいる間、インスティテューション視察に際してあなたの責任のもとに便宜を図っていただければ、あるいは他のどのようなご好意であっても、彼らは感謝するであろう (1870.4.6)。

【マ→ス (ヘンリー)】アトランティック・ケーブルによる経度決定に関するグールド (Gould) 博士の報告書がスミソニアン・インスティテューションによって出版されたと思う。その問題にとっても関心があるので、一部だけでもたらうれしい (1870.4.27)。

【マ→ス (ヘンリー)】周囲の状況は私に、日本に対して、そして国家資源を発達させようとする彼らのすばらしい努力に対して、並外れた関心を与えてきた。日本に行って、どこか適切な場所でこの政府の任務に就きたい。彼らはすでに数人のアメリカ人を雇用しており、他にも雇用しようとしているかもしれない。現在、重要な使節団が、視察や情報収集のためにこの国に向かっている途中である。彼らが、照会を行ったり、また、適切と考えられる改革の導入を助けるために日本へ行くのに適している人を推薦するように求めてくるかもしれない。私が任務を確保する際の助けとなるように、あなたがいつも若い科学者へ与えてきたご尽力を請いたい。ワシントンに滞在中の日本の大臣森氏へのあなたの言葉は、大きな力を持つだろう。そして、もしあなたの名前に言及する[引き合いに出す]ことをお許しいただければありがたい。私の仕事は常に教育の向上、科学、工芸技術に関係してきており、これらの促進に有益であろう任務を好む。私がしばらくの間オールバニー・アカデミーの校長であったこと、現在は当地の全米哲学天文学 (National Philosophy and Astronomy) [協会] の会長であることを忘れないでほしい (1872.1.4)。

【参考：ス (ヘンリー) →議会図書館合同委員会】……スミソニアン・インスティテューションは、博物学・民族学の標本交換および気象学・磁気・他の物理学的観測について、日本当局と友好関係に入った。この件に関連して、私は日本の大臣森有礼氏とたびたび交渉してきており、その人民の知的水準を上げるための彼の様々なプランに関して情報を与えてきた。これらの中で最も重要なプランは、教育上の目的のため、西欧や合衆国の科学、文学を象徴するような図書館や、生活上の実用に適するのみならず、あらゆる理論科学の原理を十分に理解するための標本、器具、模型などを備えた国立の機関を江戸に設立することである…… [下関事件] 賠償金を提案された機関の利益に資するように議会予算を組むべきである (1872.1.10) (Lanman : 1872 : 51-3、大久保編 1972 : 68-9、財部 2003 : 40-1)。

【ス (ヘンリー) →マ】日本によって合衆国に支払われる賠償金として知られ、現在は内務省にある基金700,000ドルは、江戸の科学的な機関 (institution) の設立に割り当てるべきであると提案する文書を議会図書館委員会に提出するつもりである。万一その提案が問われ、そのような特徴の計画が同意されれば、1つの職が有能で教養ある紳士に開かれるだろう。そうすれば、喜んであなたを森氏に推薦する。その件について彼と協議し、その結果をあなたにお知らせする (1872.1.10)。

【マ→ス (ヘンリー)】私の手紙へのご親切な返事を今朝受け取った。私の事に関心を持っていただき感謝している。文明の技芸の中で自分達を高めようとする彼らにも努力している彼らを支援するために、その国に機関 (institution) を設立することにまさる日本賠償金の適切な使途は、考案できないと確信している。そのような機関の設立や組織化に喜んで協力したい。そして私は、2国間の相互利益や良好な感情に貢献しようとする多くの方法を理解していると思う。私は、だれが議会図書館委員会を構成しているのか知らないが、すでに相談した親切的な上院議員フリーリングハイザン (Frelinghuysen) があなたの提案を議会に通過させる際の多いなる助けとなることは疑いない。その件で

何か支援できることがあれば、喜んでお役に立ちたい (1872.1.12)。

【マース (ヘンリー)】私が日本に着いたら、金星通過の観測に最良の場所を確かめるために問い合わせを始めるということを、サンズ (Sands) 大將およびニューカム (Newcomb) 教授と取り決めた。彼らは、いくつかの地点での気象観測を望んでいる。スミソニアン・インスティテューションの計画に適合するならば、気象学の道具を1セット私に委託していただきたい。それを用いて、科学の促進のために一連の観測を行い、あなたに報告するだろう (1873.3.24)。

【ス (ヘンリー) →マ】日本においていくつかの進歩が見られる……。金星通過の観測場所に関してサンズ将軍に報告するために、当地の人々の証言に頼らざるを得ない。あなた自身がその件に有効であると私が評価するには、あまりにも時間が短すぎる。しかしながら、空欄の用紙や雨量計、標準温度計をあなたに供与する。数々のフルセットの器具を獲得したり、その国の各地で定期的な気象観測を確立するための準備が、日本政府によってなされると期待させる理由が、森氏によってもたらされてきた (1873.3.28 (?))。

【マース (ヘンリー)】7月2日付の手紙を受け取った。日本賠償金基金の問題が議会の前の会期で取り込まれなかったことは非常に残念なことではあるが、驚くには足りない。十分な考慮がなされる時はいつでも、日本にそれを返還するべく決定がなされるのは確実であるように見える。両政府間の最近の取引によって、基金は近年増加したことを、残念ながら伝えねばならない。それは次のように起こった。昨冬、外務大臣らが密議し、外国人がその国に行き教える特権をさらに要求する好機であると考えた。それゆえ、彼らは日本政府に賠償金の未納の証書の支払いを要求した。同時に彼らは、もし日本が要望された譲歩を認めれば支払いを強くないと暗示した。ビングム (Bingham) 氏はこの要求に関わるのを拒否し、さらなる証書までその支払は弁済として提供されるべきではないと政府に言った。政府はこの種の圧力のもとに新たな特権を認めないことを選択し、過去の期日の賠償金の2つの分割払い込み金を支払った。期限がきて、ビングム氏は他に弁済が提供された証書を受け取るようにワシントンから指示された。国務長官が保管する基金は約25000ドルに増加したと思う。次の会期でその件が十分に考慮され、処理されることを切に希望する。その問題に関係する全公文書をはじめとして、基金の歴史を示すパンフレットを準備することを提案する。あなたがその問題に関心を持ってほしい。適切な行動を受ける際に、あなたの助言と影響力を希望する (1873.8.13)。

【マース (ヘンリー)】現在約800000ドルに昇る日本賠償金基金の処理に関する計画の草案を同封する。これを上院議員フリーリングハイザンに転送するとともに、アメリカ工業科学大学の設立のためにこの基金を用いる考えがあなたから示唆されたことを彼に伝えた。この件を適切に議会上に提起する際に尽力するよう上院議員フリーリングハイザンに頼んだ。私は当地にいるので、当地に学術機関を設立するために基金を用いるというあなたの考えは、この国民に最も有益な方法であるとますます確信している。もし、あなた、ヘンリー教授が同封の計画の概要に賛成ならば、尽力していただきたい。もしフリーリングハイザン氏が……を唱導する際に用いるような手紙をあなたが彼に書くならば、彼に影響力を持たせようかと確信している。当地での私の任務にあなたが関心を持っていることを知っている。教育の根拠は当地が進歩することであるが、その国の資源が今日ほど制限的でなければ、……それほど急速でない。彼らは、経済をはからねばならないことを学び始めたばかりであり、教育は重要な人々の間で効果が出始めている (1873.12.22)。

【ス (ヘンリー) →マ】ポーター・C・ブリス (Porter C. Bliss) 氏を教育あるいは外務省に関連した日本での職に推薦していただきたい。彼は1860年頃、ケンブリッジ大学の故フェルトン (Felton) 学長から紹介された。彼は、言語学研究に非常に熟達しており、この分野の科学を推進する職を得ることを熱望している若者ということだった。彼はエール大学の学生でホイットニー教授の下で研究し、卒業していなかったが、同所から文学修士の名誉学位を受けた。彼は、内務省に職を得て、南米、中米、メキシコの各地で公使の秘書として任命された。彼は一般的な民族学に関心を持っており、なかでも言語学に専念してきた。彼は、自分の言語習得能力や外交経験から、教育、あるいは外国通信員の線において重要であると考えている (1874.7.10)。

【マース (ヘンリー)】今回の金星通過のダビッドソン (Davidson) 教授一行を乗せた蒸気船が数時間で到着する見込みである。ワトソン (Watson) 教授、ヤング (C. A. Young) 教授、ホール (Hall) 教授は当地に2週間前に着い

て、長崎に出発した。ワトソン教授は当地にいる間に、彼が私に本国に手紙を書くように助言した件について話合った。合衆国がギリス (Gilliss) 中尉のもとにペルー天文学調査隊を送った時、天文学の目的のために用いる器具をその国に残した。ダビッドソン教授が持ち出しているそれらの器具は8年間必要ないだろう。天文学促進のために用いるため、それらを、適切な保証のもとに当地の文部省に貸し出せないだろうか。そのアメリカの大臣[マレー]は、適切な使用を確認するためにそれらを管理するだろう。そして日本政府はそれを欲しい人により状態で戻すことを保証するだろう。当地でいかにそれらが有利に用いられるかを私が遠隔地で確認する。そして、適切な省および保護の件に私は注意を払う。もしこの提案が賛成を得られ、あなたが同僚の委員の注意を喚起してくだされば、あなたに多いに感謝する。少なくとも、その器具は、安全・適切な使用が準備されるかどうかをあなたが確認するまで、当地に置いておく (1874.9.7)。

【マース (ヘンリー)】私の友人吉田氏は、使節・大臣としてワシントンに住むため合衆国に出帆するところである。あなたがいつもこの国に関心を示していることを知っている。そして、吉田氏が彼の国の最も立派な代表であると思われるであろうことを請け合いたい。彼および同伴の吉田夫人にご配慮願いたい。そして、ワシントンに住むことが、二国間の利益にとって有利であることと同様に彼らにとっても喜ばしいことであることを希望する (1874.10.30)。

【マース (ヘンリー)】日本賠償金の問題に関してこの冬に何かなされることを熱望する。アメリカの人々の一般的な感情とは反対に、差引勘定の支払についてなされる要求、およびその支払いがあると私は確信している。しかし、その問題が本当に公平なものに変わるかどうかはわからない。議会に [賠償金取りたてを] 免除させるだろう同様の理由が、彼らに返還させるはずである。全取引の計算書を記し、それを、印刷・配布のためにオールバニーの友人に送った。それには署名用の請願書が付いている。私は彼に、あなたに手紙を書いてその請願書を送ってよいか尋ねるように頼んだ。議会へ提示するために適切な人 [ヘンリー] の手にあることをあなたが理解することを望む。彼はあなたに印刷した声明書を送る。そのため、あなたは何が議会へこの請願書を出す際の根拠となるかを確認できるだろう。新しい大臣吉田氏がこの蒸気船でアメリカへ行く。彼はとても知的で精力的な男性であり、あなたはきっと彼を気に入るだろう。あなた宛の手紙を彼に渡すことを許していただきたい。彼の妻も彼に同伴する。彼は、おそらく森氏ほど教条主義者 [doctrinaire] ではなく、彼より実務向けの頭脳を持っている。彼は完璧な英語を話す。当地の人種の例証となる肖像画を得ようとする試みについてケプロン将軍があなたに手紙を書いたと彼から聞いた。ケプロン将軍が去って、このことをはじめとして私ができることは喜んでなんでもする。なんでもお申し付けいただきたい (1874.11.5)。

【マ [フィラデルフィア] → ス (ベアード)】万国博覧会の諸外国政府の展示の大部分がワシントンの国立博物館に寄付されたこと、そしてそれらは分類・整理のためにワシントンへ移されることを知った。多くの複製が集まるので、それらの一部を異なる博物館に配布することが提案されていると理解している。標本配布の場合には、日本の文部省代表として、東京の文部省博物館に1セットを懇請する。農業展示が同様に配布される場合には、この申請がそれにも適応されるようにご考慮いただきたい (1876.10.26)。

[添付資料]

日本の文部省の図書館・博物館

日本政府の文部省は、帝国の首都に公共図書館と教育・産業博物館を設立した。それらは、諸外国の文学、技芸・科学に精通する手段を民衆に与えるとともに、本省管下の教育諸機関にさらなる利便を供することも企図されている。すでにコレクションは大規模かつ価値あるものである。フィラデルフィア万国博覧会の本省代表は、この機会に、これらの機関に資料を収集することを熱望している。それゆえ彼らは、日本の進歩に関心を持つ人々にその施設の目的を提出し、コレクション拡大への協力を懇請する。近年外国との交流を開いた国において、技芸・科学、風俗・習慣、商業・産業、法律、政府・行政の形態を示すのに役立つものは全て、多大な関心を持って研究されている。このため、次の物が図書館・博物館のコレクションへの最も喜ばれる追加であろう：公文書、科学・教育・慈善機関の報告書、教育の方法・道具を示す書物・機械、農業・鉱業・製造業資源を示す標本。これらの機関は、多くの場合、関心ある物、価値ある物を日本から交換として送ることによって、その好意を返礼しうることが望まれる。

【マース（ベアード）】 議会が国立博物館用の建物の予算をあなたに与えなかったことを残念に思う。次の議会ではこの重要性が理解されることが望まれる。あなたが我々に送ろうとしていた物が始められたかどうかは聞いていないが、時間をどれほど必要としても、時間をかけねばならないことをあなたにご存知である。この国の芸術や博物学を示すものを個人的に集め始めた。私が大きなコレクションを作った時に、アメリカでそれを欲しい人を探すことができるかどうかかわからない。スミソニアンはそれらを集める手数料を私に与え、実際の支出を支払っていただけか。この革命が勃発して以来、文部省は著しく観察を縮小する必要があった。その博物館を築き上げることはしばらくの間ゆっくり進むだろうし、また、外国の博物館とのコレクション交換は遅れるだろうと思う。しかし、日本の物、とりわけ産業を示す物のコレクションを本国に持ち帰りたい。そして私の支出が戻ってくる確証があるのならば、そうするだろう。スミソニアンはそのような物のための適切な場所であると考えている。彼らがある種の公式な承認を私に与えれば、そうでなければ私が得ることができない多くの物の収集を可能にするだろう。2、3週間でモースが当地に来ると思う。彼は独力で来るが、おそらく当地に到着する時にはいくらか使い物になっているかもしれない。彼は少なくとも4ヵ月滞在することが期待されている（1877.6.4）。

【ス（ヘンリー）→マ】 スミソニアン・インスティテューションが、最近アルコール漬け標本を準備して……、複製標本を除去するために……配布用が作られ、文部省博物館のマレー博士に贈る……（1877.6.14）。

【マース（ヘンリー）】 あなたが文部省博物館に寄贈したアルコール漬け標本1セットの送り状を同封した6月14日付手紙を受け取った。本省および本省博物館を代表して、この価値ある寄贈に感謝の意を表し、それらを科学の関心に最大限に役立たせることを保証する。ニューヨークの日本領事館に通知する。彼はそのコレクションを日本へ転送する手配をする。日本へ向けて船に積載される時、彼は知らせてくれるだろうし、それらが送られるだろうニューヨークの場所を指示するだろう（1877.7.23）。

【マース（ベアード）】 モース教授があなたの紹介状を持参した。それは彼に関する限り、必要ではない。彼は大学の博物学教授および博物館員として当地に2年滞在させることが決定したことをお知らせする。彼は現在臨海実験所〔江ノ島〕でこつこつ研究し、充実した時間を過ごしている。我々の博物館のためにとっておいたアルコール漬け標本1セットを送ったというヘンリー教授からの通知を受け取った。礼状を送り、また転送の指示も出した。これはあなたがスミソニアンの複製標本〔配布〕から与えようとしている資料の1部と理解してよいか。私が600ドルを支払っており、あなたが我々に送ることになっているウォード（Ward）からの骨格標本を覚えているか。それをもう送っていただいたか。準備ができたら、ニューヨーク市7ウォレン通りの日本領事高木三郎氏へ通知していただけるか。そうすれば彼が転送の手続きをする。以前指示したように、シュマホーン（Schermehorn）には送らないでいただきたい（1877.8.8）。

【マース（ベアード）】 8月8日に私が手紙を書いてから、7月11日のあなたの手紙が届いた。それは私の照会事項にいくつか答えている。「アメリカの魚類」はヘンリー教授がチェックリストを送っているものであると思う。彼は通知の中で「鳥類」について言及していない。ニューヨーク7ウォレン通りの日本領事高木三郎氏に転送に配慮するよう伝えた。彼は、送られてきた物に配慮するだろう。スミソニアンから「勅令」（Firman）をいただけるとうれしい。それを賢明に使う（1877.8.9）。

【参考：文部省副大臣かんだたかひら→マレー】 先月23日付のメモを受け取りました。その中であなたは合衆国ワシントンのスミソニアン・インスティテューション長官ヘンリー教授から同インスティテューションによって文部省博物館への標本を列挙するチェックリストが付随された手紙を受け取ったとあった。返事として、ヘンリー教授へ次のように手紙を書いて欲しい。これらの標本は博物館にとって最も望ましいものであるので、受入れを感謝し、その運送に関してはニューヨークの日本領事館に送るよう要求しますと（1877.8.9）。

【マース（ヘンリー）】 6月14日のあなたの文部大臣宛の通知に感謝する。その中には、親切にもアメリカの魚類を1セット博物館に提供し、標本のリストを同封するとあった。戻されてきた返事を同封する。あなたの価値ある寄贈への感謝の証として受け取ってくださるであろう。ニューヨークの日本領事高木三郎氏へ手紙を書き、いつその標本がニューヨークへ船積みされるのかをあなたに知らせるように頼んだ（1877.8.10）。

【マース（ベアード）】 ヘンリー教授から国立博物館のためのコレクション、とりわけ博物学、人類学、芸術品、工

業品などのコレクションを作るように委託された。この信頼に応えることは喜ばしいことであるし、その件を進めていく何かをすることを望んでいる。当地の博物館 [museums] は複製の蓄積もまだないし、広く交換を始める状況にもない。しかし私は、根気強くこれを進めてきており、蓄積が始まるのを見ることを希望している。モースは夏に素晴らしい仕事をした。彼は、当地の大学と2年間の契約を結び、30の臨海実験所を設立することとなった。彼は小型海生動物標本の巨大なコレクションを作った。私は彼のセットにすぐに食用魚、食用軟体動物を加えるよう促した。彼は現在大学の準備を進めている。彼は、大学博物館での仕事同様に博物学を教える予定である。協定によって、彼は11月に本国に戻り、講演の約束を履行し、諸博物館と交換を取り決め、3月に当地に戻る予定である。彼が収集した全てのセットをあなたが得るよう取り計らうこと、そして記載や命名の際にあなたの協力を得ること、を彼は私に約束した。ヘンリー教授は、博物館は標本の費用を支払う金銭的余裕はない、少なくとも彼は何の約束もできないと書いている。費用がないと、芸術(品)、工業品等を多く集めるのは困難であろう。私はこの種の物をいくつか集めている。もし将来博物館が私に払い戻してそれらを欲するのであれば、喜んで引き渡す(1877.9.8)。

【マース(ヘンリー)】7月9日付の貴簡を受け取った。スミソニアン・インスティテューションのためのコレクション収集を私に委託していただき、私を信頼して下さっていることを感謝している。交換の方法によって当地でしうることは現在のところあまり多くない。なぜなら、物の際立った蓄積がまだなされていないし、複製標本がまだ非常にまれだからである。しかし、私はこの点について彼らの注目を喚起してきた。そして彼らの両博物館 [both their Museums] が交換用の複製標本を収集する事業を真剣に始めるよう希望する。日本の風俗習慣やその民族学などを示す多くの物を個人的に収集できるが、そのようなコレクションを一般的に作るには、必ずいくらかの支出を伴う。多くの種類の一般的な物、とりわけ美術品、工芸品をすでに集め始めた。おそらく国立博物館は将来的には私の支出を弁償して私からこれらを得ることができよう。しかし、それは2次的な問題である。交換をなし逃げるために、私ができることは喜んでしたい。彼らは貴所の寛大さや蓄積に満足しているので、その目的のために収集するように努力させるのは困難なことではない(1877.9.8)。

【マース(ベアード)】アルコール漬け魚類と鳥類を受領したという礼状をヘンリー教授に書いたところである。それらは立派な標本コレクションである。私が鳥類をざっと数えたところによると、約100くらいあると思われる。魚類のチェックリストのおかげで、全ての物に適切にラベルをつけることができる。博物館は信用に値するものになりつつある。すでに博物館はそれのために与えられた建物より大きくなりすぎている。しかし、日本土着の標本の複製の収集においては、まだそれほど多くの進歩は見られない。新しい外国の物を入手するよう手配するために、全精力を注ぐ必要があった。講演の約束を履行するために、そして家族を連れ出すために、モースはこの郵便輸送船によって帰国する。彼は同定と交換のために多くの資料を本国に持って行く。彼は多くの物をあなたにもたらし私に約束した。これは、一部には、スミソニアンの出費を省こうとする私の努力であるとみなしていただきたい(1877.10.30)。

【マース(ベアード)】本省の博物館はあなたのために食用魚のコレクションを作っている。それは約100変種(varieties)を含むと思う。準備が整い次第、お送りする。あなたのために銅の鉱石も2、3とってあるので、魚類と共に送る。当地でのコレクション収集は非常に困難である。標本を入手すべき個人的な収集家が多くないので、ほとんどすべてのものをオリジナルな出所、すなわち政府の各省から入手せねばならない。彼らは何かを供給することに好意的である(1878.2.25)。

【ス→マ】日本の魚類の大きなコレクションを準備しているというお知らせに感謝する。できるだけ早くそれらを同定し、その情報をあなたに与えることができれば嬉しい。それぞれの種について2、3の標本を送るのがよいだろう。そうすれば、1つを返却することができるだろう。また類似する標本を共通の番号を付して保存するのがよいだろう。それは同じ目的に応えるだろう。我々は日本の先史を表す物、とりわけ石器および最古の形態を有する陶器 [pottery] を保存することに特に関心がある(1878.4.2)。

【ス→マ】6月17日付の手紙を確かに受け取った。ヘンリー教授の……科学的……経験した。私たちは世界各地からほぼ毎日……急行便を受け取っている。国立博物館……嬉しい。時々あなたに提供するような物を購入……する

ことができればいいのだが。不幸なことに、議会は、このような方法で我々の博物館を豊かにするために我々が希望していた収入を与えることができなかった。我々は必然的に延期せねばならない……。文部省博物館のために望まれる標本のために予算……ひどく困惑している。私は骨格標本などの予算……当該金額の等価物を選ぶ……。ご承知のように、それは、標本を準備するウォード (Ward) 教授への勘定の一部の支払に費やされた。議会の2つの会期が過ぎた。望ましい施設を提供されなかったが、来冬には望ましい援助があると自信を持っている。それが来るまで当該の移送は不可能である。当時そのつもりはなかったが、もし博物館によってすでにあなたに送られた標本を600ドルの備品として含めるならば、適当な時期に骨格標本の追加物をあなたに惜しみなく与えるだろう。その時あなたが東京にいてもいなくても、それらはあなたが設立に尽力してきた博物館の利益になるだろう。我々が送ったようなコレクションは、だれによっても、またどのような価格でもなされえないだろう。600ドルではなおさらである。ニューヨークの8900の預金を引き出すのがよいと考える。現状では我々は……できないだろう。私にこの金額の取引証票の用紙を送って……私はそれを返却するだろう (1878.7.19)。

【ス→マ】文部省博物館に骨格標本などを供給する件に関する契約の遂行について言及せねばならないが、状況は我々にとってあまりにも厳しい。2会期前の議会から予算がつくことを期待したが、まだ予算獲得に成功していない。来冬、望ましい交付金がついたとしても、複製を出すまでに少なくとも1年かかるだろう。それまで待っていただければ、私が覚えておくことにして、その時がくるまでその件はそのままにしておきたい。鳥類や他の標本の膨大なコレクションを東京博物館にすでに送ったことを、確実にご存知であると思う。そのコレクションはセンチナル [フィラデルフィア万博] の寄贈を埋め合わせるものとみなされる。私は責任を引き受けたくないし、また、将来は900ドルの手当ては利用できないだろうと考える。しかし、将来、万一状況がもっと良くなれば、おそらく別の交付金がつくだろう。モースの標本をいくつか受け取ることを期待する (1878.9.28)。

【ス (ベアード) →マ】本状の持参人、太平洋基地に向かう合衆国蒸気船の合衆国海軍医ブランスフォード (J.F.Bransford) 博士を紹介させていただきたい。ブランスフォード博士は博物学にとっても関心を持っており、彼が日本の関心物に精通する際、手助けをしていただくようお願いする (1878.11.26)。

【ス (ベアード) →マ】……局や日本の教育、とりわけ、……1871、および1876から1878までの……に関心がある。それらの論文が何であるかはわからないが、彼の要求……インスティテューション…… (1879.2.10)。

【ス (ベアード) →マ [NY大学]】3月24日付手紙の中であなたが言及した物の値段は358が1ドル、441が1.50ドル、計2.50ドルである。我々は郵便料金納付済封筒を使うので切手はいらない (1884.4.2 (?))。

【ス (ベアード) →マ】アーキンソン (Arkinson)、……教授のための我々のカタログについてのあなたの注文358、441を用意している時、441 (クラークの原子量再計算) の余部が残っていないことが判明した。358 (ベッカーの原子量決定) のみ送ることができる。これを転送し、領収書および1.69ドル相当の差額を同封する (1884.5.14)。

【ス (ベアード) →マ】異なる博物館と日本の教育施設の関係に関してある問題がある。とりわけ、あなたがその国に従事していた時の通信において我々にもたらされたものである。備忘録を数枚送るので、その件に関して何か示唆いただければありがたい。交換部担当のBochmer氏はその件で何名かの日本公使館員に会った。しかし私には不明な点なおある。文部省は日本の教育部門と関係があり、国内の大学の教育部門とは関係がないと私は思っていた (1885.5.11)。

【ス (ベアード) →マ】日本社会に関して2、3日前にあなたに手紙を書いた時、書類全てを同封し忘れたので、それを今送る (1885.5.15)。

【ス (ベアード) →マ】日本の學術社会に関する最初の手紙を受け取った。今、2番に含まれている情報に感謝している (1885.5.21)。

【Incoming183 : 16】

日本産魚類目録136種78年捕獲 [全てスミソニアンに残っている] 5つは保存状態悪い